



《磚（狩獵紋）》後漢時代（1-3世紀） M2372



《磚》後漢時代（1-3世紀） M2372



《磚（龍紋）》後漢時代（1-3世紀） M2372



《磚》後漢時代（1-3世紀） M2372



《獸面紋玉璧》前漢時代（紀元前2世紀） M2274



《柄型玉器、玉条》西周時代 M2277

目 次

カラー口絵

考古資料調査報告より	1
------------	---

考古資料調査報告

目録

木村定三コレクション日本考古目録	
吉田 広・原田 幹・原田 昌浩・大西 遼	11
木村定三コレクション中東考古目録	
中野 智章	23
木村定三コレクション中南米考古目録	
杓谷 茂樹	29
木村定三コレクション中国・朝鮮考古目録	
山本 堯・大西 遼	39

論文

木村定三コレクションの中国古玉	
山本 堯	53

木村定三コレクション銅釧・環鈴・鈴について

目録

木村定三コレクション銅釧・環鈴・鈴目録	
金 宇大	73

木村定三コレクションについて

木村美保子夫人の思い出——愛知県美術館を去るにあたり——	
古田 浩俊	81
木村定三の文体	
石崎 尚	87
木村定三著作集補遺	
(編)石崎 尚	001(95)

木村定三コレクション中国・朝鮮考古目録

凡例

- ・本目録は、愛知県美術館に寄贈された木村定三コレクションのうち、中国考古の資料を掲載し、解説を付したものである。
- ・各資料名は調査者の見解を勘案して決定した。
- ・各資料のデータは、掲載番号、資料名称、年代、寸法（cm）、重量、材質、コレクション番号、受入時名称の順に記した。
- ・作品解説は、山本堯（泉屋博古館学芸員）、大西遼（愛知県陶磁美術館学芸員）が執筆し、解説末尾に姓のみを記した。

1. 玉製獅子香炉

年代未詳

24.4×35.6×23.5

石（玉）

M2255（玉製獅子香炉）

深緑色の玉を用いて獅子の姿をあらわす。頭部は蓋になっており、香炉としても使用することができるようにつくられている。製作年代についてははっきりとはわからず、あるいは後世の倣古作の可能性も考えられる。（山本）



2. 青銅透彫雲気紋香炉

漢時代（紀元前2-1世紀）

高8.2cm 総長14.4cm 火炉径7.1cm

243g

青銅鑄造

M2256（青銅透彫雲気文香炉）

漢代に流行した青銅製の香炉。身には小さな三脚と長く伸びた持ち手がつき、蓋は透かし彫り状の雲気紋があしらわれる。蓋と身は蝶番によって連結され、開閉することができるようになっている。漢代では博山炉に代表されるように、香炉がしばしば神仙世界と関連づけられた。蓋にあらわされた雲気紋も、おそらくそうした文化的背景と関係するものであろう。（山本）



3. 鍍金狼

漢時代

5.1×12.8×3.3

201g

鍍金、銅

M2262 (戦国 鍍金狼)

鍍金（金メッキ）がほどこされた青銅製の狼。腹部には型持の痕跡が見られ、欠損部分から内部が空洞であることがわかる。外型と中子を組み合わせた中国古来の技法で鑄造された作例であろう。アマルガム法を用いた鍍金の技術は戦国時代から発達するが、本作品のように動物型のミニチュアのような作例は漢代に比較的多く見られる。（山本）



4. 鍍金蟬

漢時代？

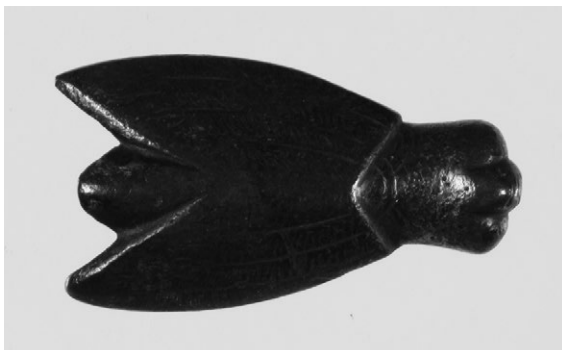
4.9×3.0×1.4

49g

鍍金、銅

M2263 (鍍金蟬)

蟬をかたどった銅に鍍金（金メッキ）をほどこしたもの。後述のように、中国では蟬は再生復活のシンボルとして、青銅器や玉器のモチーフとしても多用された。（山本）



5. 握豚

漢時代？

11.4×4.4×3.5

186g

彩色、石

M2264 (漢 握豚)

漢代から魏晉南北朝ごろまで流行した葬玉のひとつに、豚をかたどった玉を埋葬された死者の手に握らせるというものがある。本作品はおそらくそうした玉豚を模倣してつくった石製品かと推測される。(山本)



6. 含蝉

漢時代？

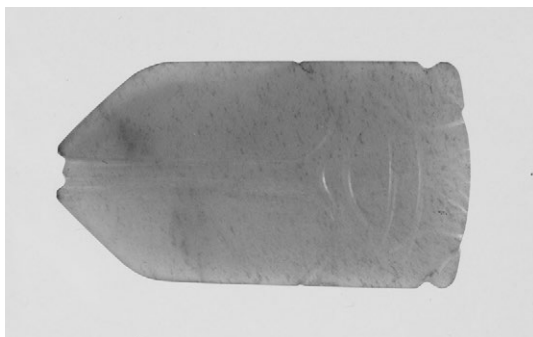
5.0×2.8×0.8

17g

玉

M2265 (含蝉)

中国古代では、死者は地下の黄泉の世界で暮らすと考えられた。そのため、長い時間をかけて地中で成長し、成虫になると地面に這い出てくるセミは復活再生のシンボルとしてあつかわれ、青銅器や玉器のモチーフとしても盛んに用いられた。そのため、蝉をかたどった玉を死者の口に含ませるという風習が古くからおこなわれた。本作品もその一例。(山本)



7. 衣環

漢時代

外径5.7 内径3.3 厚さ0.8、外径4.4 内径2.3 厚さ0.6

22g、9g

玉

M2267 (楽浪出土 漢 衣環)

環は中国古代に盛んに製作されたディスク状の玉器の一種で、『爾雅』釈器によれば、中央の孔の径が玉の厚みとおなじぐらいのものを環と呼んだという。ただし、これは実物の形態には必ずしも即してはおらず、孔が大きく細いリング状に近いものを環と呼ぶことが多い。腕輪のようにして装着したと考えられている装飾品の一種。楽浪出土の伝称があるが、定かでない。(山本)



8. 青玉魚形佩

殷周時代

1.7×5.2×0.2、1.7×5.2×0.2

5g、6g

玉

M2268 (青玉魚形佩)

魚の姿をかたどった小型の玉器で、眼や口には孔が開けられ、糸を通して使用されていたことがうかがえる。こうした玉器は殷周時代に出土例があり、死者を埋葬する棺の装飾のために用いられたとする説がある。(山本)



9. 青銅卮および承盤

漢時代？

11.9×11.9×11.8

470g

銅

M2269（青銅灯）

卮は漢代に流行した杯状の器で、青銅製のみならず玉や漆などでもつくられた。本作品は卮とそれを承ける盤が付属し、熊型の三脚から下に向かって伸びるホゾによって、両者が一体化されている。蓋には鳥の飾りがつくが、銅質が異なり、後補の可能性も考えられる。全体にやや粗雑なつくりとなっており、副葬用の明器として製作されたのかもしれない。（山本）



10. 玻璃蝉（含蝉）

漢時代（紀元前2世紀-2世紀）

5.7×3.1×0.6

28g

玉

M2270（玻璃蝉（含蝉））

前出の含蝉とはほぼ同様の造形だが、材質に違いがあり、軟玉（ネフライト）ではなく玻璃（ガラス）を用いている可能性が考えられる。玉の代用品として玻璃を使用することは先秦時代からおこなわれてきた。（山本）



11. 玉剣

漢時代？

28.8×5.8×1.9

93g

玉

M2271

副葬品として用いられた葬玉の一種。剣身および柄にはやや浅い緑色を呈する玉、柄には斑目のある白色の石を用い、両者を組み合わせているが、剣身の茎が折れている。柄頭は五枚の花弁が開いたような形状の環頭に仕上げられている。(山本)



12. 玉穀粒紋璧

漢時代 1個

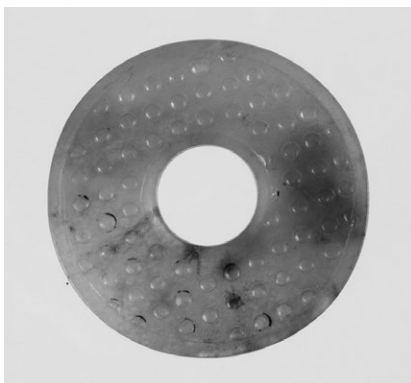
外径5.7 内径1.7 厚さ0.5

34g

玉

M2273 (玉穀粒文璧)

璧もディスク状の玉器の一種。「天円地方」の思想にもとづき、丸い璧は天をまつるための祭器と一般的に説明される。先述の『爾雅』釈器には、玉の厚みが孔の径の2倍となるものを指すとあるが、この規格は必ずしも実物の実態を反映したものとはいえない。表面には穀紋と呼ばれる丸い突起状の紋様があらわされるが、これは一説には雲気を象徴したものとされる。(山本)



13. 獣面紋玉璧

前漢時代（紀元前2世紀）

外径25.7 内径2.7 厚さ0.4

720g

玉

M2274（青玉穀粒獸文璧）

戦国から漢代にかけて流行した璧で、表面には幾重にも紋様帯がめぐり、孔の周囲には蒲紋とも呼ばれる六角形の突起状の紋様、さらにその外周には獣の顔面紋様があらわされる。この獣面紋に見られる表現上の特徴から、製作年代はおおよそ紀元前2世紀の後半と推定される。漢墓から出土する璧にはサイズにも規格性があり、被葬者の身分とある程度の相関性が見られるが、本作品のように漢尺（23cm）を越えるサイズの璧は稀少。（山本）



14. 玉璧

新石器時代後期（紀元前3300年-紀元前2300年）

外径18.5 内径4.1 厚さ1.0

844g

玉

M2275（青玉璧）

璧は新石器時代から製作がおこなわれ、長江下流域で繁栄した良渚文化では大型の優品も数多くつくられた。本作品も玉質、製作技法から見て良渚文化の遺品である可能性が高いと考えられる。中央の孔には食い違いのような痕跡が認められるが、これは「管鑽法」と呼ばれる技法によって上下二方向から穿孔されたことによるものであり、良渚文化の璧の出土品とも共通している。（山本）



15. 玉璧

新石器時代後期（紀元前3300年-紀元前2300年）

外径17.3 内径4.3 厚さ1.2

755g

玉

M2276（青玉璧）

前出の璧と同様、青玉と呼ばれる深緑色を呈する玉を加工した良渚文化の作例。表面上にはクレターのような凹みが生じているが、これは玉材を加工する際に動物の毛や革を糸鋸のように使用して切断する、「線切割」と呼ばれる技法が用いられた痕跡。同様の痕跡は良渚文化の出土品にもしばしば認められる。（山本）



16. 柄型玉器、玉条

西周時代

柄形玉器：長9.4×幅4.0×厚0.3

玉条：長10.3×幅1.4×厚0.9

長10.4×幅1.2×厚1.0

25g、22g、22g

玉

M2277（玉圭、玉條）

扁平なナイフに挟れた持ち手がつく玉器は「柄型器」と一般的に呼ばれている。名称・用途に関しては諸説あるが、裸礼と呼ばれる当時の飲酒儀礼の一種と深く関係していた可能性が近年盛んに指摘されている。玉条は細長い直方体状の白玉の表裏に魚の紋様をあらわす。「玉」と「魚」は音が通ずるため、魚の姿をかたどった玉器は古くからつくられているが、紋様として表面に刻する例はめずらしい。（山本）



17. 玉斧

新石器時代

9.0×4.2×0.7

45g

玉

M2278 (玉圭)

玉でつくられた斧の一種で、新石器時代では実用の工具としてではなく、被葬者の地位を象徴するものとして墓の副葬品に用いられたケースが多い。M2279は端部にも3ヶ所の孔が開けられているが、あるいは二次加工品であるかもしれない。(山本)



18. 玉斧

新石器時代

8.4×10.0×1.4

171g

玉

M2279 (玉鍬)



19. 玉斧

12.4×13.8×0.3

218g

石

M1039 (石鏃)



20. 玉琮

新石器時代後期～殷代（紀元前2000-紀元前1000年ごろ）

KT147-1：高13.8×幅6.9×奥行6.6

KT147-2：高5.4×幅4.5×奥行4.7

1165g、163g

玉

KT147（殷時代：1（王□2箱）、周時代：1（□国拾？年））

断面正方形の直方体の中央に円筒が組み合わさった独特の造形の玉器を琮と呼ぶ。丸い形状の壁に対し、方形が基調となる琮は一般的に地をまつるための祭器と説明されるが、実際の機能に関しては諸説あり、定かではない。琮も新石器時代から盛んに製作がおこなわれ、殷代の作例も知られているが、西周時代に入ると衰退してしまう。璧と同様、孔に食い違いの痕跡があり、内面には1mm前後の間隔で穿孔の痕跡をとどめているものもある。（山本）



21. 青銅羽状紋壺

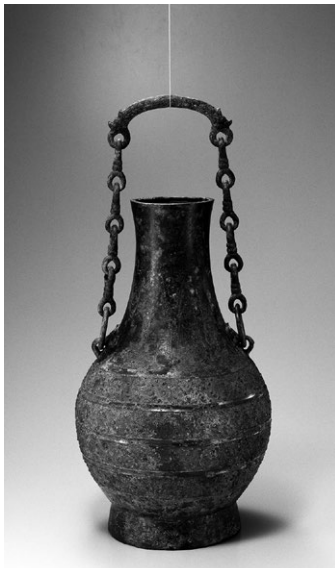
戦国時代（紀元前5世紀-4世紀）

総高37.7 身高28.5 横13.0 口径7.2

青銅鑄造

M308（青銅蟬文壺）

壺は酒や水を盛るための器で、殷代から春秋戦国時代まで継続して製作がつづけられた器種。胴部には緻密な紋様がほどこされるが、これは羽状紋と呼ばれる紋様で、戦国時代の青銅製の容器のみならず、青銅鏡の紋様としても盛んに用いられた。器形と紋様の特徴から見て、戦国中期の長江中流域で製作されたものと推定される。（山本）



22. 埴（狩獵紋）

後漢時代（1-3世紀）

34.5×17.5×7.0

陶

M2372（埴（狩獵文））

中国古代に用いられたタイルやレンガのような建築部材を「埴」と総称する。その表面にはさまざまな紋様があらわれ、当時の墓室を飾ることも多かったため、文化史的な研究の資料としても貴重。型押し技法によって、龍紋や狩獵紋、さらには種々の幾何学紋様が飾られているが、同様の紋様の埴は出光美術館にも所蔵され、本作品とおなじく楽浪出土の伝称をもつ。楽浪の遺物は日本国内にもすくなくともたらされており、あるいはおなじ墓からの出土の可能性も考えられる。今後の詳細な比較検討が待たれる。（山本）



23. 埴

後漢時代（1-3世紀）

32.3×15.2×5.9

陶

M2372（埴）



24. 埴（龍紋）

後漢時代（1-3世紀）

36.7×17.5×6.2

陶

M2372（埴（龍文））



25. 埴

後漢時代（1-3世紀）

31.5×15.1×5.1

陶

M2372（埴）



26. 銅斧

戦国時代（前5世紀-前3世紀）

上辺9.0、下辺10.3×7.1×1.3

158g

青銅

M1038（銅斧）

青銅製の工具の一種で、刃部と反対側の基部は中空のソケット状となっている。このことから、外型と中子を組み合わせた鋳型を使用した鋳造品であったことがわかる。基部にはわずかに范線が確認され、二枚の外型と中子を組み合わせた鋳型構造であったと推測される。（山本）



27. 陶質土器 高杯及び蓋

（高杯）三国時代（6世紀初頭）／（蓋）三国時代（6世紀後半～7世紀）

総高14.2（高杯）高9.3 口径10.2 幅11.6 脚部径8.8（蓋）高5.5 返り径9.5 幅11.4

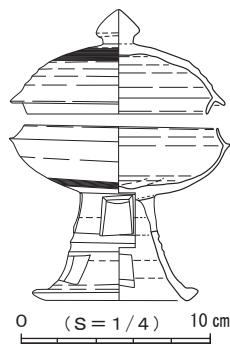
新羅（現・韓国慶尚北道及び慶尚南道）

M978（須恵器（有蓋高杯））

本作は朝鮮半島三国時代の新羅産の陶質土器である。陶質土器とは丘陵斜面を利用した地下式ないし半地下式の窯を使用し、1100℃以上の高温で焼き上げた灰色から黒灰色のやきものである。三国時代から統一新羅時代に製作された。朝鮮半島の陶質土器の技術が古墳時代の日本列島にもたらされ、日本列島産の陶質土器、すなわち須恵器の生産が開始された。

本作は高杯と蓋の年代に開きがあり、本来セットではない。本作のような蓋受けを有する高杯には、口縁部に返りの無い鈕付蓋が伴う。本作の蓋は口縁部に返りを持つが、この種の蓋は新羅では6世紀後半以降に見られ、碗等の別器種に伴うものと考えられる。

高杯・蓋とも轆轤成形で、全体に丁寧な撫で調整が施されるが、高杯の杯底部と蓋の天井部にカキメが施される。高杯の脚部には、中位の突帯を挟み上下に三方向ずつ長方形の透孔が配置されるが、4世紀後半から6世紀の新羅の高杯を特徴づける上下交互の配置である。（大西）



愛知県美術館研究紀要 第31号 木村定三コレクション編

2025年3月発行

編集・発行 愛知芸術文化センター 愛知県美術館

〒461-8525 名古屋市東区東桜1-13-2

Tel: 052-971-5511 (代)

<https://www-art.aac.pref.aichi.jp/>



制 作 共生印刷株式会社

Bulletin of the Aichi Prefectural Museum of Art No.31

Part2 Studies of The Kimura Teizo collection

2025

Edited and Published : Aichi Prefectural Museum of Art

1-13-2 Higashisakura, Higashi-ku, Nagoya 461-8525 Japan

Tel: +81-52-971-5511

Printed : Kyosei Printing Co., Ltd.